

命の町づくりを 憲法特集で紹介 共同通信が全国配信

加盟報道各社に国内外のニュースを配信する共同通信社の企画「憲法の60年」シリーズで「赤ちゃんあっせん事件」や西和賀町を舞台にした記録映画「いのちの作法」を紹介しながら「生命の尊厳・尊重」の憲法の理念を検証する特集記事を配信しています。

昨年5月3日日本国憲法施行60周年を迎えて、共同通信社では「憲法の60年」と題して月1回掲載のシリーズを企画。このほど第10回目を配信しました。記事は望まない子を産まざるを得なかった母親に代わり「わが子として育てる」人に実子としてあっせんした宮城県の菊田昇医師(91

法」が完成したこと。老人医療費無料化、乳児死亡率ゼロ達成など、命を守る取り組みの歴史や生命尊重の精神を継承する住民活動も紹介しています。

親による子どもの虐待や子殺し、子捨て、未成年者の妊娠中絶は後を絶たない今こそ「命とは何か」を問い直すときと警鐘を鳴らす企画記事となっています。

「憲法の60年」を掲載する新聞は確認できた分だけでも、神奈川、高知、山陰、中国、長崎、熊本日田の各新聞、河北、琉球の各新報、デリー、東北、沖縄タイムスの10紙が掲載しています。

「いのちの作法」各地で大好評

記録映画「いのちの作法」は、2月17日北上市のさくらホールで、23日は盛岡市の教育会館で上映会が行われました。どの会場も大入り満員で、盛岡市では早くも再度の上映会開催を検討中です。3月22日は宮城県栗原市の若柳総合センター(ドリーム・パル)で上映会があります。料金はイベント内で行われるため無料です。



「いのちの作法」撮影風景の写真入りで「憲法の60年」を特集する長崎新聞

「住民の命を守るために 私の命を賭けよう」



保健文化賞と厚生大臣表彰を受賞した時の記念写真。左から18代深澤晟雄村長、19代久保俊郎村長(当時は議長)、藤原一郎氏、17代石川包村長

深澤語録を訪ねて

昭和38年、沢内村が保健文化賞を受賞した際、深澤村長は他の受賞者とともに、受賞者の感想として「保健と私の政治理念」と題して村づくりにかける情熱をつづっている。その一部を抜粋して紹介する。

(前文略) 生命の尊重されない政治や世相の縮図のように、私の村ほど露骨にこれを現したのも少なから

う。人間の格差は絶対に許せない。生命の商品化は断じて許せないと考えることに無理があるのか。このこ

とは感傷的なヒューマニズムでもないし、人権尊重という民主主義の題目唱和でもない。それは人道主義とか憲法とかの生ぬるい思念の問題でもなく、もっと切実な生々しい生命自身、人間自体の体質的な現実課題であると解するの

つべきであり、それは思想以前であり、憲法以前であり、ましてや政策の当然の責務であると言うのが私の政治理念である。

(老人と乳児の医療費無料化、乳児死亡ゼロ、冬季交通確保など沢内村の保健医療行政の記述は省略)

このようにして暗黒社会にも一条の光が射しかけているとは思うが、余りにも将来問題が山積しており、(中略) それを考えると私の頭が重くなる。高い段階の政治解決、いかなれば国の医療制度または生命行政の抜本的反省を前提とする課題の多いことを思えば暗然とせざるを得ない。

然し、私は自分の政治理念を不動のものと考え、内にあつては村ぐるみの努力を惜しまず、更に外からの温かい理解と協力を信じながら、住民の命を守るために私の命を賭けようと思つ

録余集編

共同通信社の「憲法の60年」シリーズで「生命」をテーマにした特集に、今は亡き深澤村長と菊田医師が登場する。深澤

村長は「医療費無料化は国民健康保険法違反」を指摘され、菊田医師は「赤ちゃんのあつせんは医師法違反」とされた。しかし、両者に共通する「生命尊重の精神」は憲法の崇高な理念に結びつく。深澤村長は法律違反と言われても「憲法に違反しない」と無料化を実現、菊田医師は特別養子制度の制定に奔走、養子でも実子扱いとする民法改正に貢献した。そして今、深澤精神を継承する西和賀町民の姿は映画「いのちの作法」で感動を呼び、菊田医師の思いは熊本市の慈恵病院が引き継いで「赤ちゃんポスト」で11人の命を救っている。国民主権、平和主義と基本的人権の尊重は日本国憲法の三原則である。人命の尊厳・尊重を謳う憲法を身をもって教えてくれた二人は今、天国にあつて憲法に輝く星である。